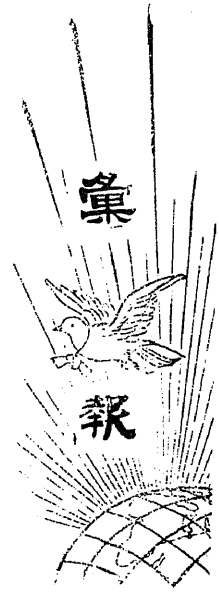

皇后陛下行啓

皇后陛下には、兼ねて仰出されたるが如く、先月廿八日午前十時御出門、柳原典侍御陪乘、香川皇后宮大夫、萬里小路、田中兩事務補助、桂侍醫、姉小路權典侍、津守權典侍、堀川命婦、平川侍醫局員等供奉、御順路を經て同二十分女子高等師範學校に行啓相なりたり。學校にては前日來諸般の準備整頓し、表門には大國旗を交叉し、玄關には紫色の幕を引き廻らし、玄關の西側には、校長始め職員一同、同東側には文部大臣、各直轄學校長其他來賓一同、玄關下には本校附屬校園生徒一同奉迎、陛下には君が代の奏樂中に御着、直ちに校長の御先導にて便殿に入御、暫時御休憩中、各高等官に拜謁仰せ附けられ、十一時、幼稚園に成らせられ、唱歌、手技遊嬉を御覽の後、附屬小學及高等女學校に臨御、各級の授業御覽、再び便殿に入御御晝餐を召させられ、一時よりは更に高等女學校及本校の授業を御覽あり、次に成績品陳列場に臨御相なり、夫より講堂に臨御あらせられ、本校生徒一同の、皇后陛下御製「みがかずば」及「此御山」の唱歌及本科四年生の体操、テーブルテニスを御覽に供し、午後三時還啓仰せ出されたり。此日、陛下には御氣色いとも御麗しく、優渥なる御言葉さへありしやに承はる。尚特に同校へは、金二百圓御下賜金ありし由

●運動會　天高く氣清し、勉學の好時期と共に身體を養ふ好季節なり。運動會の先月中に起りしもの甚だ多かりき。

女子高等師範學校生徒は、十一日立川方面に遠足を試み、同附屬小學校は同十五日道灌山に、同高等女學校は同十九日高等師範學校構内に於て、夫れ〳〵運動會を開き、女子大學校は同十九日同校内に、東京府立第一高等女學校は同十五日堀の内に遠足せり。

●女子高等師範學校卒業生宮川すみ子　今回教育學專攻の爲め三ヶ年英國に留學を命ぜられ先月洋行の途に上りきといふ。

●二葉幼稚園の近況　去る七月發行せる同園第三回報告によれば、同園の建物は目下麴町區下六番町四十八番地にあり。現在幼兒數及父母の職業は左の如くなりといふ。

現在幼兒數及父母職業

三十七名（男兒　十八名　女兒　十九名）

父母の職業

車夫	十六人	青物屋	二人
雜業	二人	裁判所小使	一人
郵便集配人	一人	畳職	一人
按摩	一人	指物職	一人
羅宇屋	二人	新行商	一人
魚屋	一人		

右母親の內職

卷煙草、洗濯張物、麻裏草履、手傳等近來煙草の手間安くなりしため何にでも手を出し內職一定せぬ由

母親の職業（父親死亡してなき者）

仕立物	家族	母と子	二人
同	同	老母、母、子	三人
洗濯張物	同	母、子供二人	三人
同	同	老母、母、子	三人
髮結	同	母、子	二人
安下宿	同	老母、母、子	三人
羽子板押繪	同	老父（郵便配夫）老母、母、二人の子供	五人
邸臺所手傳ひ	同	母、二人の子供	三人

●三輪田女學校開校式　麴町區四番町に新築中なりし私立三輪田女學校は全く落成せしにより九月四日午後一時、同校内に於て開校式を擧け、來賓大隈伯及女子大學校長成瀨氏等の演說ありしが終りて一同に晩餐會の催ありたりといふ。尙現下生徒數は百五十人あり、各學年に入學を許す由。

●日本女學校　本鄉龍岡町の同校にては、先月十八日土曜日、同校創立三週年の紀念會擧行、午後よりは種々の餘興の催ありたりといふ。

●文部省視學官の女學校視察　一度新聞紙上に女學生腐敗問題顯はれてより、女學校問題は近來頓に注目せらるゝに至り、先月中遂に文部省視學官の市內各女學校の巡視となりぬ。新紙の傳ふる所によれば、之が爲め俄に狼狽を極めたる學校もありしとか、併し表面の体裁は何れも、不都合なき樣取り繕ひありし由、されども、文部省にては此際極めて嚴重の視察を遂げ、不都合のものは、斷然たる處分に出づべしとの事なり。

●學制改革　文部省にて調査中なりし學制改革案は高等學校の組織を變更し、之を大學豫備科及び高等實業學校の二に分ち亦た小學校は四ヶ年の尋常小學校に高等科を併置し、其の年限を二ヶ年となし、自然父兄をして高等科迄就學せしむる感念を起さしむる事となし、此方針に基きて各府縣に訓令せるよし。

●文部省の私立學校取締　文部省に於ては近頃私立學校生徒に對し嚴重なる取締法を設くる筈にて目下調査中との事なるが其の方針は左の如くなりといふ。

一法律專門學校は中學卒業生の外決して入學を許さゝる事
二各學校には漸次寄宿舍を設備し生徒の監督を嚴にせしむる事
三特に女生徒は寄宿舍生活の必要あるも實際設備し難き學校に於ては市内住居の親戚緣故者其他身元確實なる保證人宅に止宿する者に非れば入學を許さゞる事
四教室に於ける情弊例は裁縫學校に於て生徒間に順番に茶菓を買はしむること等は校長に責任を負はしめ休校等の處分を爲す事

●女學生取締方法　につき當局者の語る所なりとて、新聞紙の傳ふる所によれば、近來にては各府縣に多くの高等女學校設立せられたる事なれば成るべく女子を手放して東京に遊學せしめざるやう父兄に勸告し、高等女學校以上或は以外の學藝を修めんとするものゝみ上京せしむる事とし、それ等の學校には必ず寄宿舍の設備をなさしめ、其設備なき場合には公認下宿、親戚寄宿等相當の監督法を設くる事とせば、多少今日の弊風を矯正し得べきかと云へりとなり。

●小女の就業取締　近來東京市内花柳社會にて六七歳位の雛妓を抱へ藝妓輩と共に遊興の席に侍らしめ、自然品性を墮落して結局一生を誤らしむるもの少からず、又路上に於て、或は寄席に於て音曲に從事せしむるとか、或は球乘の如きものに從事せしむるとか、大に前途を傷害する者多きを以て、是等に對する相當の取締規程を設け、其就業年齢に制限を附するは勿論、小女を犧牲に供するが如き行爲ある父母及雇主に對しては、相當の制裁をも附する方針にて昨今取調中なりといふ、至極の美擧といふべし、

◉讃岐鐵道の女子採用　同社にては各驛出札掛及び改札掛の一部及び其他に女子を採用せんとの計畫あり、客車中の喫茶室詰ボーイとして此程八名の女子（社員資格）を採用せりといふ。

●母體と乳兒との關係　と題して『通俗衛生』に母乳を以て育養すべからざる場合左の十條を擧げたり。

(1)母乳の分泌少くして其兒を養ふに足らざる時(2)乳頭の甚だ小なる或は乳房に炎症を發せし時(3)母乳性分の不良なる時(4)母體が結核または黴毒其他傳染性の病に罹りたる時(5)母體薄弱なるか或は萎黃病、神經衰弱、癲癇、精神病、等に罹るか又は痴呆なる時(6)母體十八歲未滿なる時(7)母體が次回の姙娠せし時(8)母體に月經來潮し、小兒が其間に限り容體惡しきのみならず、一般に尋常發育をせざる時(9)母體が脚氣に罹りたる時(10)母體が或る藥劑を服用する時

◉明治母の會　同會の目的は家庭教育の改善を圖るものゝよしにて會頭には松波よし子、副會頭アグネス、コーツ氏其他五十餘名の會員を有し本郷中央會堂にて開會する事とし、此程母の會叢書(年三回)第一號を發行せり

◉老人會　題號の珍らしき會は先般巢鴨村家庭學校にて開かれたり、來會者は寺尾博士母堂、後藤新平氏母堂、德富猪一郎氏母堂等、十餘名其他孫子等を連れられし人等多く集會せられ、數寄屋橋教會牧師田村直臣氏の講話あり、終りに午餐の饗應あり。餘興として家庭學校、明治女學校生徒の唱歌、邑井一の講談等あり、午後四時散會せりといふ。

●苦學書生に付きて松村介石氏の談話　載せて苦學界雜誌にあり曰く

學問は立身の本である、學問無き者は當世の役に立たぬ、此故に如何なる苦境に陷るとも學問の志を癈してはならぬとは吾人が平生の讃論である、然れども今日苦學生の狀態を見るに此れに學問を慫むるのは恰かも海上波瀾の間に泳ぎ居るもの、頭の上に大なる石を置く樣なもので、只だ沈むより外は無い、迚も耐へ切れたものでない、牛の乾を配り、新聞を配達し、乃至はウンと奮發して人力車を引いた處で、其間學問をする間は極めて尠く、切角負笈出關の志も遂に空しく水泡に歸し、歸着する所はヤケツ腹と爲つて、今更らおめ〳〵故郷に歸るよりは、イツソの事法界節か、壯士俳優か、果ては喰倒し、飲み到し、借り倒し遂には詐欺、窃盜と迄墮落して仕舞ふ、夫れ故に先づ第

一の注意は成るべく東京杯へ出て來ぬのである、地方に居て百姓なら農作、商家なら見世番、教育あるものなら小學校の教員でもしながら、其の閑に書籍を購ひ雜誌を取り寄せ、若くは歐文の先生があるなら、此れに就て學ぶを上策とす、そして地方に居て、其の地方人士の指導者たるを心懸けて居らば、必ず頭角を顯すべき期節が到來するであらう、夫れを焦燥て當も無きに東京に踏み出す時には前申す樣な進退極る馬鹿を見るから此處を一番考へねばならぬ云々

至極尤もの說なり。吾人は今日の所謂苦學生なるものに付きては、大に寒心に堪えざるものあり。殊に妙齡の女子に向て苦學を勸むるが如きに對しては、大に危憂に堪えざるものあるなり。

●女學生問題の研究

木下尙江氏、近刊六合雜誌に於て載するもの、頗る興味あるを以て、左に抄錄する事とせり、氏は曰く

女學生問題は其由來頗ぶる深奧にして是れが風紀の取締は下宿屋寄宿舍等の末流に於て成就し得べき者に非ず、一言以て之を蔽へば、是れ女學生問題に非ずして、日本社會の病症發露に外ならざるなり

となし、女子敎育の進步は文明の結果なりといへども、畢竟、生存競爭の大波既に女子を襲擊して爲めに彼等をして自活生存に苦心焦慮せしむる結果なりといひ、更に曰く

婦人自活の準備には二面の注意を要するなり、一は職業に關する物質的敎育にして、一は信仰道德に關する精神的敎育なりとす、若し此二面の準備にして調はすんば、社會と學校と共に其弊に堪へさらん、今日の問題は則ち是れなりと、而して晩近女子敎育進步の趨勢を叙し、遂に社會の無信仰と無道德と題し左の言を以て結べり。

今や日本には、宗敎の以て信仰を維持する者なく道德の以て風紀を振肅する者なし、萬人日夜

に苦慮する所の者は只だ「生活問題」のみ。此の如き社會に於て、如何ぞ人生及神性の發輝を庶幾すべけんや。發露する所のものは則ち動物性のみ。

所謂當今の女學生墮落の眞相を窺ふに、其の一部分は無資力の年少女子が學資を稼ぎつゝ苦學せんと欲する者より來る、然るに今日の社會は此の可憐なる女性に向て適當なる職業を與ふること能はず、然れ共彼等は切迫せる自活問題の爲めに是非金錢を得ざるべからず、而して獸慾の威を逞ふする今日の社會は遂に彼等を誘惑して賣淫の暗黑界に導くなり、

幸に學資ある女生に向ては又た他の大誘惑其路に待てり、彼等女生は新に解放せられて身心の自由を得たるものなり、而して其年齡正に婦人生涯の危機に立ちつゝあるものなり、社會若し『人性』と『神性』とを輝かして彼等を導かば、白糸の如き彼等は必ず之に趣かん、然るに『金力』と『獸慾』との支配する社會は彼等の動物性を刺激して奢侈と不品行とに陷らしむ、是れ當然の成行にして毫も怪しむに足らざるなり、

然れ共女學界の頽風を觀て、之を鞭撻すべき資格あるもの何處に在るや、世人は女學生の不品行を攻擊す、然れとも此の無經驗なる年少女學生を攻擊する所の者は却て他の不品行なる禽獸の如き元老紳士紳商等に諂諛して、己れ亦た之を摸倣しつゝあるの徒に非ずや、元來我國には女性の人格を認て之に對すべき倫理の思想に欠如せり、故に今や婦人解放の時期に到着して、社會に嚴正なる道德の基本を得るを能はず、女

性亦た奴隷の鐵鎖より離脱して、男子と同樣の自由の生活を欲望す、男子の自由生活とは何ぞや、即ち獸行の自由のみ、社會既に此の如し、安んぞ獨り女學生のみ是れ咎むるを得んや、吾人は先きに敎育事業には、生活問題に關する物質的方面と、信仰道德に關する精神的方面との具足を要することを言へり、而して人心只だ彼にのみ走せて、殆ど全然此に顧ることなきは今日社會の通弊なり、吾人は獨り女子敎育に於てのみと言はず、又た啻に學生社會に於てのみと言はず、日本國民全態の通患なり、苟も此の病源に向て大手術を施すに非ずんば、社會の改善得て期すべからず、吾人は日本の社會が『女學生墮落』の叫聲に其の惰眠より覺醒せんことを祈るものなり、

東京だより

擊水

▲たゞ不順でと許り、朝夕の涼しさを思ひ居り候ひしに先月始よりは俄に秋の冷氣を身に覺えて何だか、夏無しの秋來りたる樣存じられ候。軒の月すら一きわさえ渡る今日此頃、山里の月如何にあらんと推し測られ候。萩は一度咲きてもはや名殘を留めず候。燈火の影最も親しむべく候。而して何處かの一角にては、正に陣營に劍を撫し、肥馬に秣飼ふ勇士も之あるべく候、郊原の散策　机邊の端座、こゝ暫らくは何とも妙と存じ候。

▲先々月の暴風雨こそすさまじかりしものに候。當地所々に被害多く、湯島天神の金の鳥居など、見事に倒れ落ち候。地方は之がため農作物に少からぬ災害之由に承はり候。

▲ペスト又々發生して先月十七日より當地にて鼠の買上始まり、猫骨折つて人が取ると申して、愚痴をこぼす猫も之あるべく候。

▲先月中の出來事は、各學校の運動會に候。上野の赤十字社總會に候。西より東より、南より北より老若男女のつどひ來りしもの無慮十萬人と數へ候。

▲此頃の八釜しき問題は、女學生事件に候。八月の末つ方當地二六新聞に連載したるより、呼聲は俄然高まり申候。文學博士加藤弘之先生の家庭までも記載致さるゝ由聞き及び候。夫に付きては文部省視學官の巡視となり、寄宿舍問題となり、下宿屋の男女別離問題となり、いやはや隨分騷がしく候、新聞の記事の如き、無論針小棒大所ではなく、非常なる事實の誤謬もかまはず、一切一かまにして傳へ候事は事實之由に候へども、さりとて都下幾十の女學校悉く立派な教育を施して居るとは申されず、況んや、幾千の女學生中さる墮落をなせるものゝある、これ亦事實なるべく候。然しながら、之を以て直ちに女學校が丸で腐敗女學生を製造し、東京の女學生が、悉く腐敗して居るが如くに見做すは、妄の最も妄なる事に候。

▲何れ此事たるや、何人かの申し候樣に、單に女學生問題にあらずして、尙深く根本的に解釋すべき問題に候、雁行亂れて敵の伏を知るべく、たゞ表面の事實に驚いて、其事實丈けの救治に汲々として着手した所が、何の効果もあるまじく候。

▲兎角生馬の目を抜くと申す江戸の眞中に、托する學校や寄宿も考へずに、妙齡の子女を無暗に遊學させるなどは、小生には賛成出來かね候。

北海道通信

▲視學官交迭　北海道廳視學官大窪實氏は今回長野縣視學官に轉ぜられ、後任として宮城縣視學官山田邦彦氏任命せられたり

▲高等女學校落成期　目下起工中の札幌高等女學校、二階建本校堂百九十八坪は大部分落成したるが、其他の九百九十八坪七合五勺の建物も九月廿五日迄に全部落成の見込なり。

▲函館高等女學校問題　函館區の當局者は、校舍器具は區有物を一時利用しても是非とも設立し、明年度より授業を開始せしめん意向なり。

▲十月の北海天地　滿山の楓樹、二月の花よりも紅に、詩人墨客の杖を郊外に曳き、林間紅葉を燃いて酒を温むるの期となり、然かもこの秋候の自然の美に對しては轉た羽化登仙の想ひあり。

海外彙報

●米國々民教育第四十一大會　ミチアポリスに於て、本年七月七日より十一日に至る三日間の同會は、例に依りて盛大を極め會集無慮一万二千人に及びたりしが、此會合中更に全國小學教師の利益を保護する目的を以て國民教員連合會なるもの組織せられたり、會員は大抵小學教師にて、本會々合の場處に於て毎年開會すべしとの事なり。會長マーガレット、ハーレー孃曰く

今後十年を期して、教員の俸給の位置に改良を見ることなくんば、本會は實に其義務を盡さゞりしものと見るべきなり、と。

●同會幼稚園部　同會幼稚園部は九日午前九時半よりグラルデイン、オーグラッデイー孃を會長として開會せり、當日の演説は幼稚園に於ける口

語練習に關し。「言語發達の妨害」「言語涵養に關してフレーベル氏の教示」「幼稚園の言語習得に必要なる補助」等は主なる演題なりき。

●幼稚園及小學校聯合部　は翌十日午後二時半より開會せられたり、最も趣味深き論題は次の二題なりき。

（一）公立學校に於ける農業科教授の實際的價値

（二）神話と歴史

新刊紹介

▲成効　月一回　東京本郷駒込千駄木町五〇　成効雜誌社

見るから心地のよい雜誌で、讀んで見て字々金玉ならざるはなしである。欄を分つ事七、曰く立志、文苑、史傳、脩養、雜錄、處世、天火、以て紛々たる浮華輕薄な雜誌と違ふ事が分る。發刊の目的は寡に現今讀書社會の腐敗を概し、別に清新剛健な刊行物の必要を感じたからであるといふ。滔々たる他の學生雜誌から見ると優に一頭地を抜いたものである（定價一册十錢、郵税一錢）

▲歴史教授法　全一册　三宅米吉校閲　齊藤斐章著

著者は多年實際に當りて中等教育の歴史を教授し、深く斯學と斯學教授法との研究に心を潜めたる人、今や片々たる小册子の、只實口の如何を見て出版せらるゝものが多い時に此大著述のあるのはまことに多とすべきである。まだ精讀はしないが、兎に角高等の學校や中學師範に歴史を教授せらるゝ方々の缺くべからざる參考書といふべきである。（定價七十五錢　發行所金港堂）

▲女子普通作法書　全一册　大谷川内たつ・の共編

作法に關する書物は、これまで隨分少なくないけれども大抵は冠婚葬祭に關するもの許りで、日常絶えず心得べき點に應用させる樣に出來て居るのは少ない。といふ所から本書は出來たとの事である。打見たる所よく其目的に合ふた樣である。殊に卷末に高等小學校の作法教授細目を附錄とせられて居るのは教授者に取りて頗る便利だと思ふ。（定價二十八錢　發賣所　金昌堂）

寄贈新刊雜誌一覽

名稱	號數	發行所
苦學界	一九	東京神田錦町三ノ廿一、苦學社
日本之小學教師	四ノ四五	同　表神保町一、國民教育社
教育時論	五ノ日發行	同　小川町九、開發社
女鑑	二六〇、一	同　京橋築地二ノ廿一、國光社
明治新報	毎土曜日發行	同　飯田町五ノ廿四、同編輯所

東洋哲學　九ノ一〇　同　小石川原町七、東洋哲學會
教育界　一ノ一一　同　日本橋本町三、　金港堂
心の花　五ノ八　同神田美土代町二ノ一、大日本歌學會
家庭　二ノ一〇　同本郷東片町一三五、同發行所
教育實驗界　一〇ノ七　同　森川町一、　育成會
愛國婦人　月二回發行　同麹町下二番町三七、同發行所
兒童新聞　五ノ日發行　同本郷區本郷五ノ廿二、同　社
料理講義錄　前期ノ五　同京橋鈴木町一一、大日本割烹學會
女子新聞　毎號　同　所、同　社
婦女新聞　月曜日發行　同　牛込東五軒町四一、同　社
工手の母　月三回　大阪市北區西野田新家西ノ町、同新聞社
なんな　二ノ九　東京麹町區下二番町廿七、大日本女學會
遊戯雜誌　一〇　同小石川茗荷谷町九四、日本遊戯調査會
大八洲雜誌　一九六　同神田區三崎町、　大八洲館
うらにしき　一二〇　同區駿河臺北甲賀町、　尚綱社
六合雜誌　二六二　同芝區三田四國町二、ゆにてりあん會
東京教育時報　二四　同　麹町區有樂町二、同會事務所
東京教育雜誌　一五五　同神田一ッ橋通町二一、同教育會
小學新聞　四六　同　淡路町二ノ三、　同　社
女子の友　一二三、四　同　鎌倉町三、　東洋社
婦人新報　　同　社
通俗衛生　五一　大阪東區淡路町一ノ三八、大阪私立衛生會
下野教育　一八四　下野私立教育會事務所
衛生談話　二一　東京麹町區四ノ卅一、通俗衛生茶話會
山梨教育　　山梨教育會
令德　四ノ一〇　東京神田區和泉町一、令德會本部
上野教育會雜誌　一八〇　上野教育會事務所
大阪府教育會報　一九五　大阪府教育會
日本婦人　三六　東京麹町區元園町、帝國婦人協會
婦人衛生雜誌　一五五　同牛込矢來町、大日本婦人衛生會
福島教育　八八　福島教育社
秋田縣教育雜誌　一二二　秋田縣教育會、

會報

第廿六常會

明治三十五年十月四日午後一時三十分華族女學校幼稚園に於て開會せり出席者は會員并にその同伴者を合して六十餘名に及び會員野口ゆか子君には、君が主管せる幼稚園につきて着々として實施しつゝある保育の方法につきて、熱心なる演說あり、次に東くめ子君のピアノ彈奏あり、次に會員東基吉君はフレーベル氏に付きて保育者の宜く取りて學ぶべき所と、又改良すべき所ありといふ事を引きて、保育者の注意を乞ふと云ふ意の演舌あり、最後に松村ひさ子君は夏休中房州にて、實驗せられたる幼兒につきての面白き所感を述べられ、次て隨意談話遊嬉等に移り、閉會したるは午後四時三十分頃にして、近來希なる盛會なりき。

幹事會

明治三十五年十月廿四日午後二時より女子高等師範學校に於て開會次回常會の事につき協議せり

出席者は中村主幹　雨森　小關　林　大島　松村　下田幹事及東基吉氏の八氏なりき

入會

本郷區森川町二八　伊東かめ
房州富浦小學校　吉野須賀
赤坂區青山北町六丁目二九　山崎いよ
女子高等師範學校　芳賀きぬ
仝　上　大森國
仝　上　大岩のぶ
仝　上　石橋常世
大阪府西區江子島東町第二官舍　桑原いはお

轉居

四谷區永住町二へ　高橋いち
神田區猿樂町二四へ　柳井つる
千住幼稚園　園田うめ
芝區高輪南町五三　吉田しう
愛知縣知多郡龜崎幼稚園　林富美
牛込區市ヶ谷富久町七〇へ　西浦りつ
本郷區東片町四二へ　下田鶴

會費領收

自九月二十六日至十月二十五日

一金五十錢　自三十五年十月至三十六年二月　西浦りつ
一金五十錢　自三十五年八月至三十五年十二月　中島みつ
一金一圓三十錢　自三十四年十二月至三十五年十二月　羽田はる
一金七十錢　自三十五年十月至三十六年四月　高橋いち

大竹みさを	一金四十錢	自三十年十月至三十年十二月
吉住きくゑ	一金七十錢	自三十年十月至三十年十二月
千田孝壽	一金六十錢	自三十年十月至三十年十一月
寺尾きく	一金五十錢	自三十年十月至三十年十二月
伊東かめ	一金五十錢	自三十年十月至三十年十二月
早川いし	一金六十錢	自三十年十月至三十年十一月
勝田すみ	一金壹圓	自三十年十月至三十年十一月
小杉郷	一金五十錢	自三十年十月至三十年十二月
柳井つる	一金五十錢	自三十年十月至三十年十二月
須藤つれ	一金四十錢	自三十年十月至三十年十二月
大山千代	一金貳圓	自三十年十月至三十年十一月
淺岡はま	一金六十錢	自三十年十月至三十年十二月
牧野かれ	一金六十錢	自三十年十月至三十年十二月
成瀨きよ	一金參十錢	自三十年十月至三十年十二月
山崎いよ	一金六十錢	自三十年十月至三十年十二月
柴崎けい	一金五十錢	自三十年十月至三十年十二月
野澤あい	一金六十錢	自三十年十月至三十年十二月
小沼たま	一金五十錢	自三十年十月至三十年十一月
伊藤盛枝	一金六十錢	自三十年十月至三十年十二月

一金三十錢	自三十年十月至三十年十二月
一金三十錢	自三十年十月至三十年十二月
一金二十錢	自三十年十月至三十年十一月
一金四十錢	自三十年十月至三十年十二月
一金壹圓	自三十年十月至三十年十一月
一金五十錢	自三十年十月至三十年十二月
一金六十錢	自三十年十月至三十年十一月
一金五十錢	自三十年十月至三十年十一月
一金六十錢	自三十年十月至三十年十二月
一金九十錢	自三十年十月至三十年十二月
一金五十錢	自三十年十月至三十年十一月
一金一圓二十錢	自三十年十月至三十年十二月
一金五十錢	自三十年十月至三十年十一月
一金二十錢	自三十年十月至三十年十一月
一金壹圓	自三十年十月至三十年十一月
一金六十錢	自三十年十月至三十年十一月
一金二十錢	自三十年十月至三十年十二月
一金壹圓	自三十年十月至三十年十一月
一金六十錢	自三十年十月至三十年十一月

横山まき	
星野わか	
若林みつ	
園田うめ	
金子きた	
佐久間よれ	
前野さき	
玉尾こま	
上遠野あい	
保科しゆう	
脇屋よし	
加藤たけ	
北村いさ	
山中下枝	
石川すき	
中桐確太郎	
新免義勇	
吉野須賀	
近藤しげ	

一金六拾錢　自三十五年十月至三十六年三月
一金壹圓　自三十六年四月至三十五年十三
一金六拾參錢　自三十五年十三月至三十六年三月
一金壹圓貳拾錢　自三十六年四月至三十五年四月
一金三拾錢　自三十五年十五月至三十六年十二月
一金五拾錢　自三十六年十月至三十五年七月
一金六拾錢　自三十五年十二月至三十六年十二月
一金四拾錢　自三十五年十二月至三十五年十八月
一金拾錢　三十五年十月
一金六拾錢　自三十六年一月至三十六年六月
一金貳圓　自三十四年十一月至三十六年六月
一金拾錢　三十五年十月
一金拾錢　三十五年十月
一金拾錢　三十五年十月
一金拾錢　三十五年十月
一金拾錢　三十五年十月
一金拾錢　三十五年十月
一金拾錢　三十五年十月

波多野あくり
服部つな
早川しが
林　富美
芳賀きぬ
伊藤　良
新海ふみ
吉田しう
大森　國
柔原いはお
合志章子
町田孝子
富田八千代
宮崎もと
高木なみ
村井あい
木村さらゑ
相川みれ
渡邊すみ

一金拾錢　三十五年十月
一金拾錢　三十九年十月
一金拾錢　三十五年十月
一金拾錢　三十五年十月
一金壹圓　自三十四年十月至三十五年七月
一金五拾錢　自三十五年十月至三十六年一月
一金貳拾錢　自三十五年十一月至三十五年十一月
一金四拾錢　自三十五年十月至三十六年一月
一金貳拾錢　自三十五年十月至三十五年十一月
一金五拾錢　自三十五年十月至三十五年十八月

岩田ゆき
奈良あい
益田一枝
大岩のぶ
石橋常世
内藤この
大津まん
平野みよ
小林ふぢ
安東てい
井上たつ

寄附

言文一致國語綴り方　一冊

右　近藤とき子君より本會へ寄附せられたり。謹しんで厚意を謝す。